2025年度大会

コメント

ナショナリズム研究にとっての ナショナル・インディファレンス概念
――「ナショナル・インディファレンスとジェンダー」――

佐藤 成基

「ナショナル・インデファレンス」とは何か

「ナショナル・インディファレンス(national indifference)」の概念は、タラ・ザーラが2010年の論文「想像の非共同体――分析概念としてのナショナル・インデファレンス」において、ナショナリズム研究のための「分析概念」として打ち出したものである(Zahra 2010)。マーティン・ヴァン=ヒンダーアハターとジョン・フォックスが編集した2020年刊行の論文集『ナショナル・インディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』には、この概念の発展可能性を追求した論文が数多く集められている。ヴァン=ヒンダーアハターとフォックスはその序文の冒頭で「「ナショナル・インディファレンス」は、過去20年間で、ナショナリズム研究を前進させたもっとも革新的な概念の1つに数えられる」(Van Ginderachter and Fox 2019: 1=2023: 1)と述べている。では、この概念がどのような意味で「もっとも革新的な概念の1つ」と言えるのか。それが今回の東欧史研究会大会で行われた、それぞれに異なった地域を扱い、また異なった問題意識からの3つの報告に共通する基本的な問いであった。

では、そもそもナショナル・インディファレンスとはどのようなものを意味しているのか。それについて確認するところから始めよう。まず訳語についてであるが、「インディファレンス(indifference)」を単に辞書的に「無関心」と訳すのではなく、あえて原語をそのままカタカナ表記のままにしておくのは、この概念の多義性を反映したものである。ヴァン=ヒンダーアハターとフォックスの序論のなかでは、以下のように「ナショナル・インディファレンス」が説明されている。

> ナショナリストたちが喧伝してきたサクセス・ストーリーとは対照的に(中略)、ふつうの人々(ordinary people)はネーションに囚われてなどいなかった。むしろかれらはネーションという問題に直面したとき、それに無関心(indifferent)であるか、両義的(ambivalent)であるか、便宜的(opportunistic)であるかなのである。しばしばそう考えられているのとは違い、かれらはナショナリズムの魔力に屈していたわけではなかった(Van Ginderachter and Fox 2019: 1=2023: 1[邦訳は一部変更した。以下同様])

つまりナショナル・インディファレンスとは、一部の「ナショナリスト」(ナショナリズムを先導した政治活動家、知識人、官僚など)とは異なり、多くの一般住民はネーションに対して「無関心」であったり、「両義的」であったり、「便宜的」であったりする事態を指している。ここで指摘しておくべきは、「インディファレンス」とは、単に文字通りに「無関心」を意味するのではなく、そもそも「無知」であったり、またネーションに対して「両義的」(2つ以上のネーションへの帰属を持つ)であったり、「便宜的」であったり(ネーションへの帰属を状況によって使い分ける)する人々の意識や行動をも含んでいるということである。そのような原語の多義性を担保するため、あえて「インディファレンス」というカタカナ表記を用いるのが、ここでは(まだしも)適切であろう。

ナショナリズム研究における意義

では、このようなナショナル・インディファレン

ス概念がナショナリズム研究においてどのような意義を持つのか。ヴァン=ヒンダーアハターとフォックスの序論（Van Ginderachter and Fox 2019）を参考にしながら、次の３点を指摘することができる。

第一は、中東欧のナショナリズム研究において支配的であった「諸民族の監獄」「諸民族の目覚め」「抑圧されていたものの復活」といったイメージからの解放である。元来ナショナル・インディファレンスの概念は、ジェレミー・キングの「ブトヴァイス人」研究やピーター・ジャドソンのハプスブルク帝国下の言語境界の研究など、中東欧研究をベースに展開されてきたものであり、同じチェコを中心とした中東欧史の研究者であるザーラも、この概念が中東欧のナショナリズム研究において持つ重要性を強調している（Zahra 2010）。

しかし、現在注目されているのは、ナショナル・インディファレンス概念が、中東欧という特定の地域を超え、他地域を含めたナショナリズム研究全般にとっての適応可能性であろう。ヴァン・ヒンダーアハターとフォックスの編著で追求されているのもこの点である[1]。

そこで第二の意義として指摘できるのは、アーネスト・ゲルナーに代表されるような、近代主義的なナショナリズム研究が前提にしてきた目的論的な歴史観の相対化である。この近代主義的な歴史観とは、第三共和制期フランスを扱ったユージン・ヴェーバーの古典的著作『農民からフランス人へ』のタイトルに典型的に示されているように、近代化とともに（例えば産業化、資本主義の発展、近代国家形成などにより）、それまでネーションへの帰属意識を全く持っていなかったような人々（「農民」）が、特定のネーションへの帰属意識を持つ人々（「フランス人」）へと変化していくことを当然のこととととらえる見方である。それに対し、ナショナル・インディファレンス概念は、近代化はネーション形成（あるいは社会・政治・文化などの「ネーション化」）を必然的に伴うものではなく、その社会的浸透の度合いや感情的動員力のあり方は地域や時代的な文脈によって様々であること、その展開の過程もまた歴史的諸事件に応じて不確定に変化していること、そしてネーションへの「インディファレンス」もまた近代という19世紀以後の大きな歴史的変化の一部であることを含意している。となると、ゲルナーやアンダーソンをはじめとするナショナリズム研究における「近代主義的」なアプローチは、もはやこれまでのように共通の前提にできないということになる。

さらに第三の意義として強調しておくべきなのは、ナショナル・インディファレンスの概念が、構築主義的なアプローチが持つ「構築」全能主義的歴史観に正面から挑戦しているという点である。1990年代以来盛んとなったナショナリズム研究において広く用いられるようになった構築主義的アプローチにおいては、政治エリートや知識人といったエリートが政治運動や言論活動などを通じてネーションを構築するという側面に関心を寄せる。しかし、ナショナル・インディファレンス概念は、まさに彼らが直面した一般住民のネーションへの「無関心」を明らかにしている。一般の人々は、ナショナリズムに燃えたエリートたちが考えるほど容易には「ネーション化」されないのである。「ネーション化」は様々な形で障害に突き当たり、停滞し、しばしば「失敗」する。そこでのエリートと一般住民との関係は、現地での階層構造や政治構造、宗教や言語などの分布などの観点から多面的に捉えていく必要があるだろう。

このように、ナショナル・インディファレンスという概念は、近代主義や構築主義に基づくナショナリズム研究が過渡的ないし例外的とみなしてきた現象に光を当て、それ自体をナショナリズム研究の独自の対象としてテーマ化したという意義は広く認識されるべきである。とはいえ、「生湯と共に赤子を流す」という事態に陥らないための注意も必要であろう。世界が「近代」という段階に巻き込まれていく17世紀から20世紀にかけて、「近代」の発祥の地である欧州に限らず世界中の地域と人々が、「ネーション」への帰属を通じてカテゴライズされるようになったというマクロな歴史的変化それ自体を否定することはできない（cf. Storm 2024）。そのような世界の「ネーション化」のグローバル・ヒストリーを踏まえた上で、その中にナショナル・インディファレンス概念を位置付ける必要がある。そこでこの概念の意

表1　ナショナル・インディファレンスの様々な側面

誰から見たインディファレンスか	誰のインディファレンスか	どのような状況か	分析のカテゴリー		ネーション形成との関係
ナショナリスト	ナショナリストが直面する一般住民	ナショナリストから見た住民のインディファレンス	想像の非共同体（ザーラ）		ネーションの構築の困難・失敗
研究者	一般住民	無知（無関心）	ナショナル・インディファレンス（ザーラ）	日常のネーション（フォックス）、日常のエスニシティ（ブルーベイカー）	ネーションの不在、浸透度の低さ
		両義性			他のネーションとの共存
		便宜性			境界領域
研究者	一般住民、エリート	自明性	平凡なナショナリズム（ビリグ）		ネーションの再生産

義は、「ネーション化」の過程がその到達先を当然視することのできない不確定な過程であること、ナショナリストが想定するほどには容易なものではないことに我々の注意を促してくれることにある。ナショナル・インディファレンスの概念は、諸ネーションの形成という近現代の社会・政治・文化の全般的な変容の過程（その「失敗」も含め）と関連づけることによって、はじめてその学術研究上の意義を持つことができるものと考えられる。

ナショナル・インディファレンスの様々な側面

とはいえ、一言で「ナショナル・インディファレンス」と言っても、それが意味するものは単一ではない。特に「インディファレンス」が何を意味するのか、誰から見た「インディファレンス」のことを指しているのかなどの問題がある。例えば、ザーラはナショナル・インディファレンスを「分析概念」として提示しながら、他方でナショナリストが潜在的に動員可能でありながら動員されない人々を指して用いた「根本的に否定的なナショナリストのカテゴリー」であるとも述べている（Zahra 2010: 105）。つまり一般住民の「無関心」はあくまでナショナリストから見た「無関心」のことであり、ザーラの言葉を用いるならば、それは彼らによって「想像された非共同体（imagined non-communities）」なのである。その観点からすれば、ナショナル・インディファレスはナショナリストにとっての「実践のカテゴリー」ということになる。もちろんナショナリストからみたインディファレンスと実際の住民自身のインディファレンスとの間に全く関係がないというわけではない。しかし前者のインディファレンスを研究者が現実の住民のインディファレンスとして概念化するためには、ナショナリストが生み出す発言・言論以外の史料的な裏付けが必要となる。

このような多様な側面を整理したのが表1である。誰から見たインディファレンスなのか、インディファレンスとは何なのか、それを分析するための概念を細分化するとどうなるのか、そしてそれぞれのナショナル・インディファレンスはネーション形成というマクロで長期的な歴史的過程とどう関連するのかをまとめている。

一行目はナショナリストから見た住民のインディファレンスで、ザーラがこの概念に注目した初発の問題意識はここから発している。ここでナショナル・インディファレンスが、ナショナリスト自身が用いた「実践のカテゴリー」であるとすると、ザーラはそれを「想像の非共同体」という「分析のカテゴリー」を用いて捉えなおしたわけである。

研究者から見たインディファレンスである二行目の一群が、分析概念としてのナショナル・インディファレンスに相当している。ただしその「インディファレンス」には、すでに見たように単なる「無関心）」のみならず、「無知」、「両義的」あるいは「便宜主義的」な意識・態度が含まれている。それぞれ、ネーションという概念がまだ浸透していない状況、複数のネーション概念が共存し、競合し合っている

状況、また境界地域（特に国境線が不明確であったり変更されたりする場合）で複数のネーション概念を便宜的に使い分ける事態が発生しやすい状況に対応している。いずれにせよ、それらの状況は、ネーションへの帰属が「確立」される以前のネーション形成途上のどこかの段階に位置付けられる（結果として「確立」に成功しない場合も含め）。これはナショナル・インディファレンス概念の有効性が高い19世紀から20世紀にかけての中東欧地域に広く見られる状況である。

さらにこの表には、ナショナル・インディファレンスに近い概念として、マイケル・ビリグが提唱している「平凡なナショナリズム」の概念も含めている。ビリグの「平凡なナショナリズム」概念は、すでに確立された国民国家（特に先進諸国の）において、ネーションへの帰属意識が（エリート、一般住民双方において）広く共有され、制度化され、自明視された状況に対して用いられる概念であり、自明視され「凡庸化」されたナショナリズムがネーションの再生産する役割を果たしている点が注目される（Billig 1995）。その点においてはナショナル・インディファレンス概念とは異なっているようにもみえる。しかし、ヴァン=ヒンダーアハターとフォックスは、ナショナリズムの「凡庸化」は19世紀から20世紀にかけて、ネーション形成途上の段階でのナショナリスト運動にも等しく適用可能であると述べている（Van Ginderachter and Fox 2019: 5＝2023: 7）。それは社会学者フォックスが人類学者シンシア・ミラー=アイドリスとの共著論文で提起している「日常のネーション」（Fox and Miller-Idriss 2008）や、ナショナル・インディファレンス研究に影響を与えている社会学者ロジャース・ブルーベイカーが用いる「日常のエスニシティ」（Brubaker et al. 2011）といった概念を用いて分析可能な状況である[(2)]。じっさい『ナショナル・インディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』に収録されたガーボル・エグリの論文では、ナショナル・インディファレンスを「日常のエスニシティ」という概念を用いることを提唱している（Egry 2019=2023）。この概念は、ネーション（ないしエスニシティ）というカテゴリーが日常的な実践のなかでどのように用いられているのかを問うことを可能にするものであり、インディファレンスの様々な形態を考察する場合に有効であろう。

ナショナル・インディファレンスとジェンダー――各報告について

ここで、今回の3つの報告それぞれについて、簡単なコメントや疑問点を提示しておこう。共通テーマは「ナショナル・インディファレンスとジェンダー」であり、どの報告もこの両者の関係に特に注目しているが、分析の観点はそれぞれで相当に異なる。

まず林報告は、ナショナル・インディファレンス概念がイタリアの「ネイション化」の過程に適用可能であることを示したものである。そこでのナショナル・インディファレンスは、イタリアのネーション形成を進めようとする「ナショナリスト」の観点から論じられているが、「インディファレンス」の問題とされているのが「南部」と第一次大戦後の「未回収地」である。ここで興味深いのは、「南部」に対しては、そこが「野蛮」であり「国民化不可能」とする人種主義的な人類学的観点から「インディファレンス」が説明されたのに対し、旧ハプスブルク帝国領の「未回収地」に対しては、ナショナルな「同胞」とみなす水平的ナショナリズムの言論が現れたことである。この対比は興味深いが、なぜこのような差異が生まれたのかについては明確な言及がなかった。しかし、係争相手の有無が大きな要因であることは明らかであろう。これがネーションへの「関心／無関心」の変化に果たす役割は（自明とは言え）重要である。その観点から、「未回収地」における一般住民のナショナル・インディファレンスが問題にされれば興味深い研究が可能になるのではないだろうか。

ナショナル・アイデンティティとジェンダーという観点からは、第一次大戦中の軍事動員において用いられた「守るべきイタリア人女性」というジェンダー化されたナショナリスト的表象が、脱走兵（南部出身が多い）の発生を妨げることができなかったという点が指摘されている。イタリアにおけるナショナル・インディファレンスを示す一つのエピソー

ドとして興味深い。

最後に林報告では、アメリカ合衆国に移民したイタリア人のナショナル・インディファレンスという問題を提起し、「ナショナル・インディファレンス論のトランスナショナル化」の可能性を指摘している。アメリカにおける移民とエスニシティの研究では、「イタリア人」意識がアメリカの他の住民・移民と対峙するなかで形成された（20世紀前半の2つの世界大戦の時期に）とする議論もあり（cf. Luconi 2003）、むしろ空間的に「イタリア」から離れることがネーションへの「関心」を強めるという効果を果たすとも考えられる。移住とナショナル・インディファレンスの関係性は今後展開可能なテーマになりうるが、林報告はその点を指摘している。

2つ目の衣笠報告では、第二次大戦後にポーランド領となった旧ドイツ領上シレジアに入植し、「再ポーランド化」を任せられた男女二人の教師の回想文を取り上げ、両者の視点からみたナショナル・インディファレンスを比較している。女性教師は、ポーランド語を話せない子供たち、ドイツ人教師をポーランド人教師よりも上にみてしまう大人たちを問題にしながら、「再ポーランド化」に対して悲観的な見方を示していた。それに対し男性教師は、挫折を経ながらも「再ポーランド化」に一定の成果を上げたことに一定の評価を与えていた。この違いについて衣笠は、「再ポーランド化」を「男性の仕事」とみなす、「ジェンダー規範を組み込んだ植民地主義」の発露であると説明している。

「再ポーランド化」を任された教師を「ナショナリスト」とみなすのであれば、この報告も「ナショナリスト」の観点から見た上シレジアの小学校の生徒や地域住民の「ナショナル・インディファレンス」に関する理解の相違ということになる。となれば当然、地域住民自身のネーションに対する意識や行動はどうだったのかということが問題になるだろう。例えば、ジム・ビョークは「「わたしはネーションの境界を取り払った」――第二次世界大戦中と大戦以後のネーションの転換とローマ・カトリック教会」と題された論文の中で、カトリック教会が、上シレジアを含むドイツとポーランド国境地帯の住民のネーション帰属の「転換（switching）」（ドイツからポーランドへ）を積極的に推奨したことについて論じている（Bjork 2019=2023）。これなどはネーションに対する典型的な「便宜的」な態度であると言えるだろう。その後も、この地域からの大量のアウスジードラーの発生を考えると、同様の「便宜主義」的な態度は長らく保持されていたと考えられる。

衣笠による男女の学校教師の「再ポーランド化」に対する見方の相違については、必ずしも両者のジェンダーの違いだけで説明できるものではないようにも思われる。というのは、二人は出身地や言語能力においても顕著な差があったからである。女性教師はポーランドが戦後ウクライナに割譲することになった旧東部領から来た入植者であり、ポーランド人というよりもウクライナ人とみなされることが多く、またドイツ語能力はほぼゼロであったのに対し、男性教師はクラクフから赴任してきた人物であり、しかもナチの統治時代にドイツ語を学んだ経験があった、つまりある程度ドイツ語を話せた。このような二人のバックグラウンドの違いが自分たちの職務の理解の差を生み出したとも解釈できる。そこでジェンダーがどう作用したのかどうかは、既存史料だけからでは正確に理解することは難しい。

3つ目の松前報告は、社会主義体制期のブルガリアにおけるポマク（ブルガリア語を話すイスラム教徒）のナショナル・インディファレンスを扱っている。まず、国家の側は（すなわち「ナショナリスト」の観点からは）、彼らを「強制的にトルコ化されたブルガリア人」とみなし、その「曖昧な国民意識」が問題視され、名前、儀礼や服装の改変（「社会主義化」）を通じて彼らの「国民化」が進められた。特に女性（特にその服装）は、国家の側から見てナショナル・インディファレンスの対象になりやすいという指摘もされている。他方、一般のポマクの人々の側では、男性は「国民的」なものへと徐々に変化が進んだのに対し、女性は「国民的」なものと宗教的なものの併用や便宜的な使い分けを行うことで、国家からの距離を取る傾向が見られたという。これはナショナル・インディファレンスをめぐる興味深いジェンダー差であると言えるだろう。

しかし、ナショナル・インディファレンスの問題をナショナリズム研究の視点から考察する場合、そこで何が「ネーション」とされているのか（つまり、どのような「ネーション」に対する「インディファレンス」なのか）が問われなければならない。ブルガリアの場合、第一次大戦前に王国だった時代、松前報告が扱っている社会主義体制の時代、そしてそれ以後でネーションの意味は異なってくるだろう。社会主義体制期には「社会主義（的）」という概念がしばしば「国民的」なるものとほぼ同義で用いられている。社会主義は普遍主義であるはずだから、両者は理論的には対立するはずのものだが（cf. Whittington 2019=2023）、ここではこの両者が重なり合っていると考えられる。このようなネーション概念の時代による変化は、ナショナル・インディファレンスをネーション形成の歴史の中に位置付けるためにも重要な問題である。

以上の三報告全体を通じて気になった点は、ネーションという概念とジェンダーという概念に対する捉え方の「分析度」の違いである。ナショナル・インディファレンスという概念を用いることで、ネーションへの帰属の状況依存性・不確定性については注意深く論じられているのに対し、ジェンダーへの帰属については実体視されている場合が多い。ナショナル・インディファレンスの論者がブルーベイカーの「認知的」アプローチからインスピレーションを得ているとするならば（Van Ginderachter and Fox 2019: 2=2023: 2）、ネーションと同様ジェンダーもまた「実践のカテゴリー」であることに留意する必要がある。となると、「ナショナル・インディファレンスとジェンダー」というテーマもまた、2つの異なる「実践のカテゴリー」の間の関係性という視点から論じられるべきであろう[3]。

問題索出のフレームとしての ナショナル・インディファレンス概念

最後に再びナショナル・インディファレンス概念の意義についてふり返り、コメンテーターとして私なりの考えを簡単にまとめてみたい。

これまで繰り返し述べてきたように、ナショナル・インディファレンスの概念は、ネーション形成や社会・政治・文化の「ネーション化」の歴史的過程と（目的論的な想定なしに）関連づけられる必要がある。この点をあらためて強調するのは、ナショナル・インディファレンスという概念を用いることにより、ネーションに対する人々の「インディファレント」な状態を取り出して記述するだけに終わってしまうのではないかという危惧を持つからである。長期的なネーション形成の過程のなかで、ネーションへの帰属が人々にとってほとんど関心を惹かないこともあれば、強く感情的に訴えかけることこともあれば、単に制度化されたカテゴリーとして人々の行動を規制することもある。また、政治活動家がネーションの概念に訴えて人々を動員することに成功することもあれば、失敗することもある。ナショナル・インディファレンスは、このように多様に変化するネーションと人々との関係性の一端を把握する概念である。たしかに人々は常に「ナショナリズムの魔力の虜になっているわけではない」（Van Ginderacher and Fox 2019: 1=2023: 1）。だが、ネーションへの帰属が人々の生活チャンスに影響を与えたり、ネーションへの帰属意識・帰属感情が人々を特定の行動へと駆り立てることもある。

「インディファレント」な状態を含め、このように多様に変化するネーションと人々との関係性を全般的に理解するためには、ネーションを「実践的カテゴリー、制度化された形式、不確定な事件」（Brubaker 1996: 7）として捉えるブルーベイカーの「認知的」で「事件史的（evantful）」なアプローチがやはり有効であると思われる。そこでネーションは「カテゴリー化し、コード化し、フレーミングし、解釈する反復的・蓄積的過程のもたらす流動的で不確定な産物」として扱われる（Brubaker, Loveman, Stamatov 2004: 87=2016: 270）。そのような視座から、人々（エリートも一般住民も含め）がネーションというカテゴリーをどう理解しているのか、またどういう状況で、どういう関心からネーションというカテゴリーを用いているのか、さらにネーションを喚起させる政治行動を成功させ、ネーションを共鳴性（resonance）あるカテゴリーにする要因は何なのかを問うていくこ

とができる（cf. 佐藤 2017）。

ナショナル・インディファレンス概念は、ネーションと人々との結合の仕方を根本から問い直すものである。それはナショナリズム研究にとって問題索出のフレームとしての意義を持っていると言える。つまりこの概念は、研究すべき問題を索出することにより、ナショナリズム研究上の新たな出発点を提示するものである。ナショナル・インディファレンスを「分析概念」として提示していたザーラもまた、次のように述べている。

> 最終的にナショナル・インディファレンスの概念は、説明を要する特殊性や例外事例ではなく、学術的研究の出発点として最も生産的でありうる。私たちは、欧州の人々がネーションに帰属するということを想定するのではなく無関心を想定するべきであり、彼ら自身がなぜ、いかにして政治的、文化的、社会的に結びつき合うのかを一から探求すべきなのである（Zahra 2010: 118）。

そこで強調されるべきは、ネーションへの帰属関係の状況依存性、不確定性である。フォックスらは『ナショナリズムとナショナル・インディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』の「結論」のなかで、ジャドソンの議論を参照しながら次のように述べている。

> この概念は状況依存的な不確定性（circumstantial contingencies）を強調する。それは所与の歴史的状況に関して問われるべき実践的諸戦略や諸問題の緩やかなセットを意味している（Fox et al. 2019: 253=2023: 353）。

そこで問われるべき「実践的諸戦略と諸問題」は豊富にある。しかし、ナショナル・インディファレンス概念はそれを解明するための分析ツールを提供するものではない。分析のツールは別途に研究者の側で用意すべきものである。ブルーベイカーの「認知的」アプローチはそのための立脚点として有効だとは思われるが、ネーションというカテゴリーを用いた諸実践を条件づけるマクロな社会的・政治的文脈との関係性まで解明できるものではない。そのための分析枠組みの探究が、今後進められていくべきである。

注

（1） ヴァン＝ヒンダーアハター／フォックス編『ナショナリズムとナショナル・インディディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』では、本を編集する過程で中東欧以外の研究も掲載しようとして論文を募集し、82の論文の応募があった。しかし、西欧に関する３つの応募を除き、他は全て中東欧研究であったという（Van Ginderachter and Fox 2019: 2=2023: 2）。これはまだ、ナショナル・インディファレンス概念が一般に認知されていないということを意味している。その点、今回の大会の報告でイタリアの事例が取り上げられていることの意義は大きい。

（2） さらに近年、「日常のナショナリズム」の概念が、「安定した時代（settled times）」に自明視され、「平凡化」されたネーション概念の利用（儀礼的な国旗の使用、食料品の分類など）を指す概念として用いられるようになっている（Bonikowski 2016）。

（3） 例えばブルーベイカーは『トランス』のなかで、アメリカ合衆国における人種とジェンダーの「カテゴリー化」のされ方の違いについて分析している（Brubaker 2016）。

参考文献

Billig, Michael, 1995. *Banal Nationalism*. Sage.

Bjork, Jim. 2019. “‘I Have Removed the Boundaries of Nations’: Nation Switching and the Roman Catholic Church during and after the Second World War,” in Maarten Van Ginderachter and John Fox (eds.), *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe*, Routledge.（河合竜太訳、2023年、「「わたしは諸国民の境を取り払った」――第二次世界大戦終結期上シレジアにおける国民の乗り換えとローマ・カトリック教会」『ナショナリズムとナショナル・

インディディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』ミネルヴァ書房）

Bonikowski, Bart. 2016. “Nationalism in Settled Times,” *Annual Review of Sociology* 42: 427-449.

Brubaker, Rogers. 1996. *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*. Cambridge University Press.

――― 2016. *Trans: Gender and Race in the Age of Unsettled Identities*. Princeton University Press.

Brubaker, Rogers, Loveman, Mara, and Stamatov, Peter. 2004, “Ethnicity as Cognition,” in Rogers Brubaker, *Ethnicity Without Groups*. Harvard University Press.（佐藤成基訳、2016年、「認知としてのエスニシティ」佐藤成基・高橋誠一・岩城邦義・吉田公記編著『グローバル化する世界と「帰属の政治」』明石書店）

Brubaker, Rogers, Feischmidt, Margit, Fox, John, and Grancea, Liana. 2006. *Nationalist Politics and Everyday Ethnicity in a Transylvanian Town*. Princeton University Press.

Egry, Gábor. 2019. “Beyond Politics: National Indifference as Everyday Ethnicity,” in Maarten Van Ginderachter and John Fox (eds.), *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe*, Routledge.（姉川雄大訳、2023年、「政治を越えて――日常的民族実践としてのナショナル・インディファレンス」『ナショナリズムとナショナル・インディディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』ミネルヴァ書房）

Fox, John and Miller-Idriss, Cynthia. 2008. “Everyday Nationhood,” *Ethnicities* 8 (4): 536-563

Fox, John et al.. 2019. “Conclusion: National Indifference and the History of Nationalim in Modern Europe,” in Maarten Van Ginderachter and John Fox (eds.), *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe*, Routledge.（桐生裕子訳、2023年、「結論――（再論）ナショナル・インディファレンスと近代ヨーロッパ・ナショナリズムの歴史」『ナショナリズムとナショナル・インディディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』ミネルヴァ書房）

Luconi, Stefano. 2003. “Forging an Ethnic Identity: The Case of Italian Americans,” *Revue française d’études américaines* 96: 89-101

Storm, Eric. 2024. *Nationalism: A World History*. Princeton University Press.

Van Ginderachter, Maarten and Fox, John. 2019. “Introduction: National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe,” in Maarten Van Ginderachter and John Fox (eds.), *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe*, Routledge.（金澤周作訳、2023年、「序章　ナショナル・インディファレンスと近代ヨーロッパ・ナショナリズムの歴史」『ナショナリズムとナショナル・インディディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』ミネルヴァ書房）

Whittington, Anna. 2019. “‘Citizen of the Soviet Union - It Sounds Dignified.’ Letter Writing, Nationalities Policy, and Identity in the Post-Stalinist Soviet Union,” in Maarten Van Ginderachter and John Fox (eds.), *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe*, Routledge.（福元健之訳、2023年、「ソヴィエト連邦市民――なんと壮麗な響きでしょう」『ナショナリズムとナショナル・インディディファレンス――近現代ヨーロッパにおける無関心・抵抗・受容』ミネルヴァ書房）

Zahra, Tara. 2010. “Imagined Non-Communities: National Indifference as a Category of Analysis,” *Slavic Review* 69: 93-119.

佐藤成基 2017「カテゴリーとしての人種・エスニシティ・ネーション――ロジャース・ブルーベイカーの認知的アプローチについて」『社会志林』64号1巻：21−48。